群教セ	H01 － 01
	平28.261集
	幼児教育

自分の思いや考えを出し、相手の思いや考えに気付いたり受け入れたりして共に遊ぶ幼児の育成

――共通する体験や活動を基にした遊びを通して――

特別研修員　久保田　あゆみ

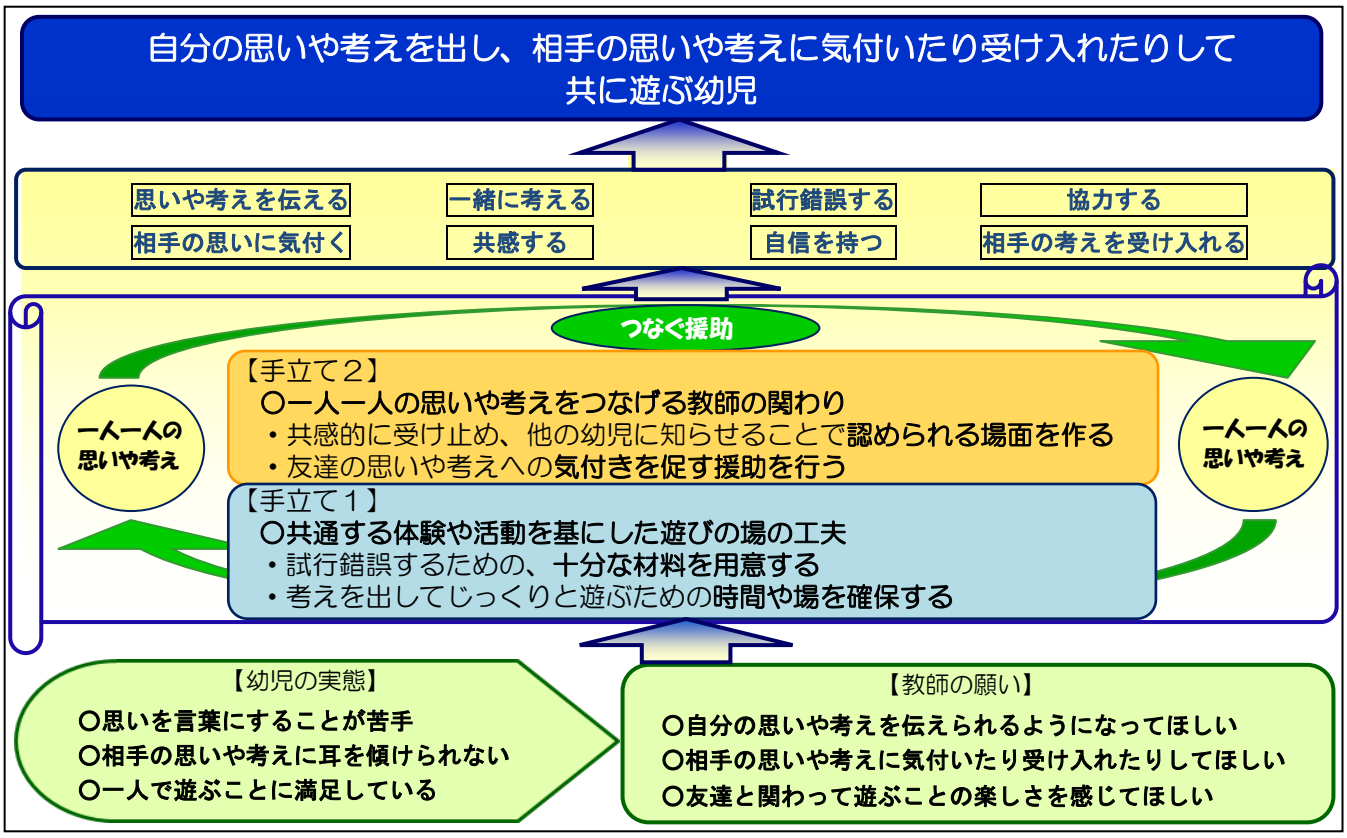
Ⅰ　研究テーマ設定の理由

幼児は、これまでの集団経験や仲間との共通の経験を基に友達と思いや考えを伝え合い、次第にイメージを広げて見立てをしたり、役割を決めそれらしく動くことを楽しんだりするようになる。幼稚園教育要領解説　第２章　５　感性と表現に関する領域「表現」には、「幼児が安心して自分なりのイメージを表現できるように、教師は一人一人の発想や素朴な表現を共感をもって受け止めることが大切である。」とも表記されている。

本学級では、自分の考えをはっきりと主張する幼児が多く見られるものの、思いを言葉でどう表現したら良いか戸惑う幼児、友達の思いや考えに耳を傾けられない幼児、一人で遊ぶことに満足している幼児も見られる。このような実態から、共通する体験や活動を基にした遊びを設定し、試行錯誤するための十分な材料を用意し、じっくりと遊ぶための時間や場を確保したいと考える。また、友達の思いや考えに気付き耳を傾けられるようになるための言葉掛けをしたり、思いが出せたときには共感的に受け止め、他の幼児に知らせることで認められる場面を作ったりしたい。そのことを通して、幼児は自信を持って自分の思いや考えを出したり、相手の思いや考えに気付いたり受け入れたりして共に遊ぶ幼児を育成できると考え、本研究テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　保育改善に向けた手立て

教師が幼児に共通する園や地域の体験や活動を基にした遊びの場を工夫し、一人一人の思いや考えをつなげる関わりをすることで、幼児は、友達との共通する体験を基に楽しかったことを振り返り、自分の思ったことや考えたことを伝えたり、相手の思いや考えに気付いたり受け入れたりしながら、共に遊びを楽しんでほしいと考える。そのために、次のような手立てを設定した。

【手立て１】共通する体験や活動を基にした遊びの場の工夫
・試行錯誤するための、十分な材料を用意する
・考えを出してじっくりと遊ぶための時間や場を確保する
【手立て２】一人一人の思いや考えをつなげる教師の関わり
・共感的に受け止め、他の幼児に知らせることで認められる場面をつくる
・友達の思いや考えへの気付きを促す援助を行う

手立て１は、共通する体験や活動を基にした遊びの場として、物的、空間的、時間的な環境を工夫することによって、幼児が試行錯誤を繰り返し、思いを巡らせたり考えを出したりする姿が見られると考える。また、友達のしていることに興味・関心を持ち、関わって遊ぶ姿につながると考え設定するものである。

手立て２は、自分の思いを言葉にすることが苦手な幼児が、少しでも思いや考えを出せた際には、共感的に受け止めて他の幼児に知らせ、多くの友達や教師から認められる場面を作ることで、自信を持って思いや考えを出す姿につながるだろうと考え設定するものである。さらに、一人一人の思いや考えをつなぐための援助として、友達の思いや考えへの気付きを促すように言葉掛けを工夫することで、自分の思いや考えとの違いに気付いたり、折り合いをつけたりしながら共に遊ぶ姿につなげていきたいと考える。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　共通する体験や活動を基にした遊びを設定し、十分な材料を用意し、じっくりと遊べる時間や場を確保したことで、試行錯誤することを楽しむ姿が見られた。また、思いや考えを言葉にすることが苦手な幼児に対し、寄り添うように話を聞き共感的に受け止めたり、他の幼児に知らせたりし、その幼児が認められる場面を作ったことで、友達と関わる楽しさを感じている姿が見られるようになった。

○　友達の思いや考えへの気付きを促す援助を行ったことで、友達の思いや考えに耳を傾けられなかった幼児が、自分には思い付かなかったことに気付くことができた。さらに、相手の思いや考えに気付き、自分の思いや考えとの折り合いを付けながら遊ぶことができるようになった。

○　遊びの中で困難が生じた場面では、困ったことを伝え、どうしたら良いか考えたり、相手の考えを受け入れたりしながら共に遊び、一緒に解決しようとする姿が見られるようになった。

２　課題

○　共通する体験や活動を基にした遊びを友達同士で進める中で、うまくいかず困難を感じた場面で、教師がすぐに声を掛けたり、解決策を提案したりするのではなく、幼児同士で解決方法を見いだせるように援助の方法を探っていくことが課題である。今後、幼児が「今、何を思い、何を考えているか」や「友達とどう関わろうとしているか」を読み取り、タイミングを見極めながら援助していくことが必要である。

実践例

１　活動名　　「遊園地遊びをしよう」（５歳児・10 月）

２　本活動について

本学級では、親子遠足で遊園地に行っており、その共通の体験が基となって「遊園地を作りたい」という思いが幼児に生まれたことが「遊園地遊び」のきっかけとなっている。「遊園地遊び」では、遊園地の遊具などの形や大きさ、動かし方などについて、友達と思いや考えを伝え合う姿が見られると考える。また、人が乗れるようにするためにはどうしたら良いか友達と一緒に考えたり試行錯誤をしたりしながら遊び、協力する姿が見られると考える。

以上のような考えから、本活動では以下のような指導計画を構想し実践した。

(1)　研究に関わる５歳児の教育計画

期	Ⅵ →		Ⅶ →		Ⅷ →		Ⅸ →			Ⅹ →		
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発達の過程	・先生や友達と関わって遊びながら新しい環境に慣れていく時期 ・友達と一緒にいろいろな遊びにじっくりと取り組む時期				・友達と力を合わせて積極的に活動に取り組み、頑張ろうとする時期 ・目的に向かって友達と一緒に頑張る時期					・友達と関わる中で自己を発揮し、自信を持って遊びや生活を進めていこうとする時期		
テーマと関わる幼児の姿	・思ったことや、考えたことを伝えながら友達と遊ぶことを楽しむようになる。 ・友達と一緒にじっくりと遊びを楽しむようになる。				・友達に思いや考えを伝えたり、友達の思いや考えを受け入れたりしながら遊びを進めるようになる。 ・友達と一緒に考えたり、工夫したり、試したりしながら力を合わせて作ることを楽しむようになる。					・共通の目的に向かって友達と相談したり協力したりしながら、遊びを進めるようになる。		
研究に関わる活動	・お祭り遊び				・遊園地遊び					・劇遊び		

(2)　事前の活動→本時の活動→事後の活動

	ねらい	伸ばしたい資質・能力	幼児に経験させたい内容
事前	・「遊園地遊び」でしたいことをイメージする。 ・想像したことを友達と伝え合う。 ・自分なりに考えたり工夫したりすることを楽しむ。	・自分の思いや考えを伝える力	・遊園地を想像し、どのようなことがしたいか思い巡らせる。 ・友達とやりたいことを伝え合う。 ・どのような物をどのように作ったら良いか考える。 ・必要な材料を考える。
本時	・製作の方法を考えたり、必要な材料を考えたりして試行錯誤することを楽しむ。 ・自分の思ったことや考えたことを友達に伝える。 ・友達がどのようにしたいか聞いて、思いに気付いたり、考えを受け入れたりする。	・友達の考えに気付いたり受け入れたりする力	・友達と作り方や遊び方を考えて、必要な材料を用意し試行錯誤して作ることを楽しむ。 ・遊びの中で、思ったことや考えたことを友達に伝える。 ・友達の思いや考えを聞き、受け入れたり受け止めたりしながら遊ぶ。
事後	・友達と相談して役割を決め、友達とのやり取りを楽しむ。 ・年中児に対し、「また遊びに誘いたい」という親しみの気持ちを持つ。 ・楽しかったことを友達と伝え合う。	・試行錯誤して取り組もうとする力	・「遊園地遊び」で、友達と相談したり協力したりしながら遊びを一緒に進める。 ・「遊園地遊び」に年中児を招待する。 ・「遊園地遊び」の写真を見て楽しかったことを話題にし、またやりたいという思いを持つ。

３　本時及び具体化した手立てについて

「遊園地遊び」で、自分の作りたい遊具などの形や大きさ、動かし方など、どのような物をどの材料でどのように作ろうかと友達と思いや考えを出し合う姿を大切にしたいと考える。そして、実際に乗れる物にするため、試行錯誤する中で思いや考えを伝えたり、受け入れたりしながら遊びを進めてほしいと考える。

【手立て１】共通する体験や活動を基にした遊びや場の工夫

・親子遠足で行った遊園地を基にした遊びを設定する。

・試行錯誤できるように大型ダンボールや空き箱、ガムテープなどの材料を用意しておき、幼児の要求に応じられるようにしておく。

・保育室以外のテラスや芝生でも遊べるようにテントやシートを設置するなど場を確保する。

・思いを巡らせ没頭したり、じっくりと考えたりして遊ぶための十分な時間を確保する。

【手立て２】一人一人の思いや考えをつなげる教師の関わり

・幼児が自分の思いや考えを伝えたくなるように、思いに共感したり、楽しかったことを思い出すような言葉を掛けたりする。また、思いや考えを伝えられたことを認めたり他の幼児に知らせたりする。

・自己主張の強い幼児には、「〇〇ちゃんは、どう思っているかな」と、友達の思いに気付けるように言葉を掛け、相手の話を聞くことができたときには認める。

4　保育の実際　　活動名「遊園地遊びをしよう」

(1)　事前の活動（環境の構成・教師の援助・幼児の姿）

遊園地を想像し、どのようなことがやりたいか思い巡らせ友達とやりたいことを話し合うことができるように「どんな遊園地にしようか」「作るためにはどんな材料が必要かな」と言葉を掛け、幼児から要望として出された材料を準備した。

本時の活動に至る一週間程前、N児が「華蔵寺公園には、豆汽車があったよね。豆汽車を一緒に作らない？」と仲の良いM児に呼び掛け一緒に豆汽車作りが始まった。その後、N児、M児と共にその他の幼児も豆汽車が通るためのトンネルや飛行機、観覧車、タクシーといった乗り物作りに意欲を示し作り始めた。

(2)　本時の活動

【ねらい】　友達と一緒に「遊園地遊び」を進める中で、自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを聞き、受け止めたり受け入れたりしながら遊ぶことを楽しむようになる。

幼児の姿　　－C児の変容に視点を当てて－	教師の援助（◎手立て１　〇手立て２　┆┆ 教師の見取り）
［ジェットコースターを作る場面］（図１） C児は、ジェットコースターの座席を作ったが、座ってみると座面が狭いと感じた。 C児：「もっと大きいのが作りたい」 教師：「小さかったの？どの位の大きさの段ボールが良いか、先生と一緒に探しに行く？」 C児：「うん」 教師：「どんな大きさのものがいいかな？」 C児：「これにする」 M児：「C君、何を作るの？」 C児：（無言） 教師：「何を作るかM君に言えるかな？」 C児：「お尻が入る大きいのを作るの」 M児：「ぼくも一緒に手伝うよ」 C児：「うん。ありがとう」 M児：「C君どこを切ったらいい？」 C児：「ここの辺」 M児：「分かったよ。じゃあここを鉛筆で印付けようか」 二人で切り始めたが、M児は切り口が大幅にずれていく。C児はそれに気付きつつ、M児に伝えることができなかった。 図1 ジェットコースターの台を作る場面	◎テラスや芝生でも遊べるようにテントやシートを設置する。 ◎大型段ボールや空き箱、ガムテープなどの材料を用意しておく。 ┆C児は、作ったものが思い通りのものでなかったため、納得のいくものを作ろうとしているのだろう。┆ ◎C児の思いを受け止め、必要な材料を一緒に探した。また、C児が用いる材料として納得しているかどうかを確認する。 〇思ったことをM児に伝えてほしいとの願いから言葉を掛ける。 ┆自分の考えを友達に伝えたことから一緒に製作遊びが始まったのだろう。また、M児から、どのようなものにしたいかを聞かれ、自分の考えを伝える姿にもつながったのだろう。┆
［ジェットコースターの遊びが始まる場面］（図２） C児、I児、M児は保育室前でダンボールの斜面を利用しジェットコースターの遊びをするが遊戯室に運ぶことを考える。 C児：「やっと運べた。待つ所も作ろう」 教師：「待つ所ね、良い考えだね」 I児：「ぼくも手伝う、積み木使う？」 M児：「ぼくも積み木を一緒に運ぶよ」 ソフト積み木を並べて待合場所にする。	┆豆汽車や飛行機等を遊戯室に運び、遊園地遊びをする友達を見て、同じ場所で遊びたいと思ったのだろう。┆ 〇C児が考えを出すことができたことを認め「待つ所ね、いい考えだね」と共感する言葉を掛けた。

年中児：「楽しそう、交ぜて」 Ｃ児：「いいよ」 教師：「この椅子Ｃ君たちが作ったのよ」 年中担任：「すごい、Ｃ君とM君がこれを作ってくれたのね」 年中児：「Ｃ君たちすごい、ありがとう」 Ｃ児：「僕がスタートの合図をするよ」と合図を送り、遊びを盛り上げた。また、楽しそうに遊ぶ友達を見て「お客さんいっぱい来てくれる」と笑い、誇らしそうな表情を見せた。 図2 ジェットコースターで遊ぶ場面	○座席をＣ児が中心となって作ったということを年中児担任や乗客として来た年中児に伝える。 自分が作ったもので喜んで遊ぶ友達を見て喜びを味わっているのだろう。
〔急流滑りに遊びが発展した場面〕（図３） Ｃ児は、ダンボールで作った座席を木製滑り台で試し出す。 Ｉ児：「続きどうするの？」 Ｃ児：「急流滑り作ろう」 Ｊ児：「私もやってみたい、交ぜて」 C児I児：「急流滑りだよ」「楽しいよ」 Ｊ児：「運動会で使ったさらさらの滝みたいなの置いたらどう？」 教師：「Ｊちゃんの考え、みんなはどう思う？」 Ｉ児：「Ｊちゃん、良い考えだね、置いてみようよ」 Ｃ児：「さらさら置いたら本物の急流滑りみたいになった」 Ｃ児は滑った時、段差に引掛かりタイヤが外れ、困っていた。 教師：「どうしたら良いかみんなに聞いてみようか」 Ｃ児：「タイヤが外れた。どうしよう」 Ｉ児：「タイヤを外してダンボールだけで滑ってみる？」 Ｃ児：「うん、滑ってみる」（タイヤを外して滑る） Ｃ児：「楽しいよ、Ｉ君もやってみる？」 Ｉ児：「本当だ、楽しい、芝滑りみたいだね」 友達と試してみることの面白さを味わいながら遊ぶ。 図3 急流滑りに見立てて遊ぶ場面	◎給食後も遊びの続きができるように時間を確保する。 Ｃ児は、作ったものを友達や教師に認められ、遊びを楽しくするために工夫しようとしたのだろう。 自分の考え付かないことに触れることで、相手の考えに気付いたり受け入れたりする姿につながるだろう。 ○Ｊ児の考えを受け止めＩ児、Ｃ児、M児にＪ児の考えを伝えた。 ◎Ｊ児、Ｉ児と一緒に、滝に見立てたものを設置する。 ○Ｃ児に「どうしたら良いかみんなに聞いてみようか」と思いを伝えることを促す言葉を掛ける。 Ｉ児はＣ児の言葉を聞いて、どうしたら良いか考え、解決方法を探ろうとしたのだろう。

(3)　事後の活動（環境の構成・教師の援助の工夫・幼児の姿）

遊園地遊びの続きができるように材料を用意した。また、幼児の「こうやって遊びたい」「もっとこうしたい」という思いや考えに寄り添って話を聞き、共感的に受け止めるようにした。

幼児は、友達と協力して急流滑りを遊戯室に運んだり、観覧車を完成させて好きなキャラクターを作って乗せたりしながら意欲的に遊んだ。また、ショーをするためのステージを作って歌や踊りを披露することもあった。年中児が遊びに参加したときには、新たな考えを遊びに取り入れて、チケットを配ったり案内したりするなど、その後も遊園地遊びは３週間程継続した。

５　考察

親子遠足という共通した体験や活動を基にした遊びを設定したことで、友達と共感し合える部分があることから、どのようなものを作り、どのようにしたら楽しめるか、目的を共にする姿が見られた。また、場所や時間の確保に努め、大型段ボールや空き箱をはじめとした材料を十分に用意したことにより、じっくりと考え試行錯誤を繰り返す姿につながったと考える。さらに、教師が思いを認め共感的に受け止めたことで、自信を持って友達に思いや考えを伝えようとする姿にもつながったと考える。

友達と遊びを進める過程で、うまくいかず困難を感じた場面では、どうしたら良いか、思いや考えを出し合う姿が見られた。教師は適切な言葉の掛け方を探ったが、幼児の自分たちで解決しようとする姿を見守り、言葉を掛けるタイミングを見極めていくことが必要だということを改めて認識することができた。